2022年11月16日　3歳児公開保育研修会
～保育を見よう・保育を語ろう～

保育実践の場に身を置き、感じ考えたことについて

言語化し対話することで自分の実践理論を再構成していく。

保育実践から立ち上がる問いと向き合うことが、

「カリキュラム・マネジメント」の循環を生むことを体感する。

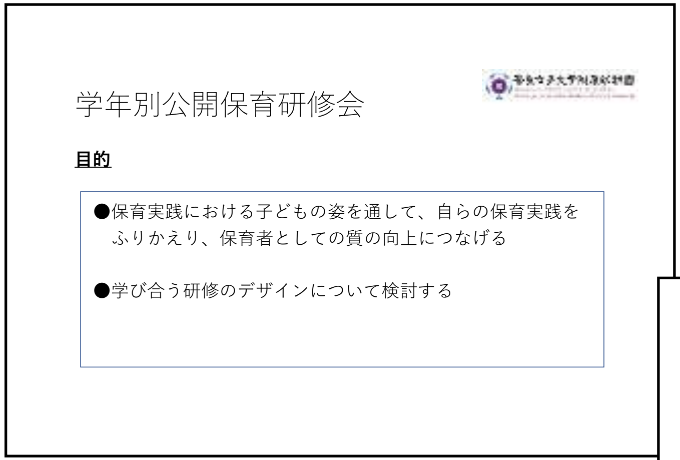
午前中は、３歳児の保育実践を他学年や他園や研究者の先生方が参観しました。保育後、実践者がD.D.を実施している間に参加者の皆さんにも小グループに分かれて、当日の保育を通して語るD.D.に取り組んでいただきました。当日の保育実践から感じ考えたことをそれぞれの先生方が言語化し15分間の語り合いを進めました。

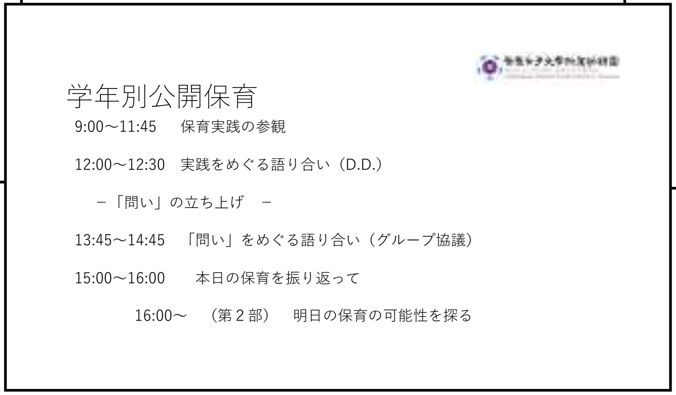
実践者および各グループでの語り合いから、午後の語り合いの問いを見出し、さらに実践者も加わって小グループでの語り合いを進めていきました。ここではその問いを自分自身の実践に引き付け、自らの保育観についても丁寧に言語化していくことに試みました。そしてこの日の研修を通して何を感じ考えたのかを改めて言語化し、自らの学びについて捉える時間も設けました。また奈良市保育総務課の新井雅枝先生にもご助言をいただき、研修会は一旦終了。

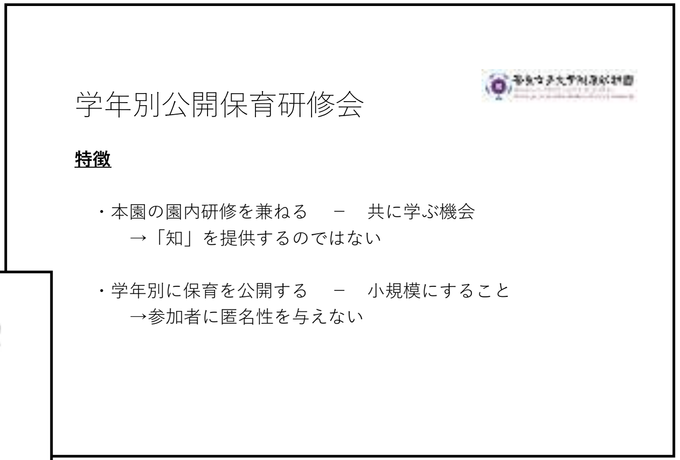
第二部では「明日の保育の可能性を探る」として改めてその日の保育実践を振り返る時間をもちました。

みなさんご参加ありがとうございました。

（参加者：１４名）







本研修会を通して感じ考えたこと

子どもが夢中になることを支えるとは…

どんぐりむしに興味を持ち始めた子ども達の姿から、この日は保育室前に処理していない大量のどんぐりを箱に入れ、木の葉や枝、土などとカップをともに置いておきました。
登園してくるなり、着の身着のままどんぐりむしを探し始め、カップに集め、お家を作り始めました。仕度をしに保育室に行く気配もありません。
わたしには大きな迷いが生じました。手を止めさせて仕度をさせに行くべきか…このまま気のすむまでどんぐりむし探しをするか…
この時のわたしは迷いながらも、子どもの荷物をとり、すぐ近くの長椅子に置いて遊び続けることを選択しました。
どうして、わたしはすぐに仕度をすることを促さなかったのだろうか…
その場面はD.D.でも話題になり、なぜその判断をしたのかを言語化しようと試みました。

普段は遊びを転々としたり、友達の動きに合わせて何となく遊びを選択していた子ども達が仕度もせずにどんぐりむしを探し始めている姿がこの日はありました。いつもなら身仕度は手早く済ませている子ども達でした。
園の生活の流れとしてある身仕度をすることは必要なことだと考えるわたしと、楽しいんだから遊びを続けてやりたいわたしが葛藤を起こしていました。悩んだ末、かばんをその場におろさせ存分にどんぐりむしを関わる時間をもちました。
こんなに必死に一つのものを探し、見つけるたびに歓声をあげる子どもの姿に面白さを感じていたのです。だから仕度をすぐにさせることで気持ちを途切れさせるよりも、遊び続けることを選択したのです。３０分以上もどんぐりむしを見つめる子ども達は「遊びを見つけた瞬間」と出会ったのだと捉えたのです。

「身仕度はいつでもできる」「遊びの瞬間はその時にしかない」
でも、どこかで「ルールとしてすべきこともある」という考えが払拭しきれません。自分のしたいことがあれば何でもありというわけでもない。ずっと残るわたしの中のもやもやは、そのわたしの考えを自覚化させました。

保育を公開すること ーみなが学ぶ場としての心もちとはー

他者の声を受けて（一年目の実践者の声）
協議会の場。（中略）私が心揺らいだ場面は何一つ語られなかった。「みんなで話をする場面では身を寄せ合って話した方が、意味を共有しやすいのではないか」「先生が無駄な動きをしていることが多かった」というご指導もいだたいた。（中略）私の保育がアドバイスの対象になることが悔しくてたまらなかった。「今まで彼らと一緒に生きてきたのは私なのに」とご助言いただく際にはそんな思いも渦巻いた。

公開保育であるということ
公開保育とは何だろうか。「よりよい保育」について考える時間だろうか。かつてわたしもそう思っていたような気がする。だから、「うまくできた保育」を見せなければならないと遊びの盛り上がりが公開保育にあたるように計画してもっていくことをしていた。それは、計画ありきの保育であり、遊ばせるための環境だ。
今は違う。どういう意味を子どもと創りながら過ごした先に今があるか。そして今、わたしが何を考え子どもと向き合うか。それを公開する日だ。それでもどこかで、「うまくいっただろうか」と自分の評価が気になってしまう。
一つの実践を通してそれぞれが「感じ考えること」を出し合いながら保育について考える時間にしたい。
しかし「感じ考えること」の中には「わたしだったらこうするのに」「なんであんな対応だったんだ」「どうしてそう考えるんだ」と自分の考えを言葉にしたときに批判として受け取られるものになてしまうこともある。
それぞれの感じ考えたことを、差異のまま残しともに学ぶ場にする研修デザインとはいかなるものか。

参加者のふりかえりより（抜粋）

保育者の思いを押し付けず、子どもの気持ちに寄り添い子ども主体で保育を行う大切さを改めて感じることができました。

語り合うこと、聞き合うことが自分にとっても、相手にとってもためになることが改めて分かりました。そのようなことができる関係になるのは簡単なことではないですが、意識していきたいと思います。

遊びって難しい！子ども達が見つけた楽しいの一瞬をどれだけ見つけられるか、出会えるか。大切にしていきたいと思いました。